



TITLE:

大学図書館と学習支援・教育支援: 京都大学での実践を通じての考察

AUTHOR(S):

古賀, 崇

CITATION:

古賀, 崇. 大学図書館と学習支援・教育支援: 京都大学での実践を通じての考察. 2012

ISSUE DATE:

2012-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/153405>

RIGHT:

Takashi Koga.

大学図書館と学習支援・教育支援 —京都大学での実践を通じての考察—

私立大学図書館協会阪神地区協議会

2011年度第2回定期総会・講演会

(2012年2月20日, 桃山学院大学)

京都大学附属図書館研究開発室

准教授 古賀 崇

tkoga@kulib.kyoto-u.ac.jp

http://researchmap.jp/T_Koga_Govinfo/

1

本日の内容

- はじめに:「京都大学附属図書館研究開発室」の概要と活動
- 京大での取り組み(1):ポケット・ゼミ「情報源を読み解く」
- 京大での取り組み(2):教員対象インタビューなどを通じての、学内でのニーズの把握
- まとめ:図書館として考えるべきことは何か

2

はじめに:

「京都大学附属図書館研究開発室」
の概要と活動

3

研究開発室 ウェブサイト



<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/rdl/>

関連論文

- 拙稿「京都大学附属図書館研究開発室の活動について」『名古屋大学附属図書館研究年報』第9号, 2011, p. 13-20.
<http://hdl.handle.net/2433/139495>

4

「研究開発室」のあらまし

- (1985年4月 前身の「調査研究室」設立)
- 1996年4月設立
- 2009年1月 初の専任教員(任期制)として古賀が着任
- 「情報リテラシー教育・講習研究会」(2009年4月～)
 - 現在、学内教員(古賀含め4名)と学内図書館・室(附属図書館と各部局(研究科・学部等)図書館・室)の担当者で構成
 - 教員・職員の協働による研究開発の場

5

直面する課題と対処

- 「情報探索入門」
 - http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/support/index.php?content_id=3
 - 1998年度より実施→新たな展開は？
 - 図書館として孤立した授業になってしまっている(他の科目とのつながりが無い)、との指摘
- ↓
- 新たな授業アプローチの試み:「ポケット・ゼミ」
- 「他とのつながり」の模索:学内教員インタビューなどを通じて

6

「情報源を読み解く」

京大「ポケット・ゼミ」での試み

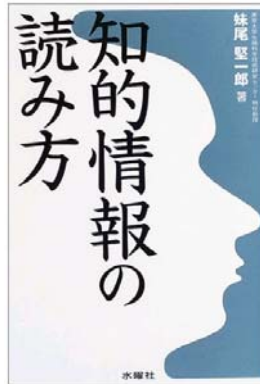
7

京大における「ポケット・ゼミ」 (ポケゼミ)とは

- 正式名称:「全学共通科目 新入生向け少人数セミナー」
- ポケゼミの位置づけ・ねらい:新入生に対し、京大としての最先端の研究成果などに触れさせる
 - 各科目で原則10名程度まで。主に前期開講
 - 半数程度(約1600名)の新入生が受講
- ↓
- 平成23年度ポケゼミ「情報源を読み解く」(古賀担当)
 - ねらい:情報源の「構造」や、各種情報(源)の読み方・活用法を理解する
 - 種類ごとの特徴、「時間の流れ」、研究過程とのかかわりなど

8

前提となる本(1)



- 妹尾堅一郎『知的情報の読み方』水曜社, 2004.
- 妹尾堅一郎『考える力をつけるための「読む」技術』ダイヤモンド社, 2002.
 - いずれも、情報源の構造・位置づけ・作られ方を意識した「読み方」を示す

9

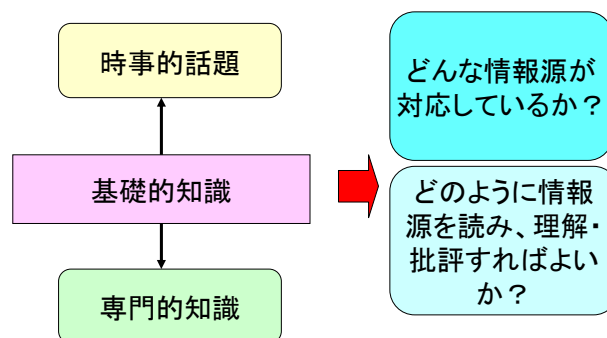
前提となる本(2)



- 小山田耕二・日置尋久・古賀崇・持元江津子『研究ベース学習』(コロナ社, 2011)
- 全5章+付録(授業の実例)
 - データの収集・分析、論文化、発表など
- 古賀は4章「学術文献の探索と評価」を執筆

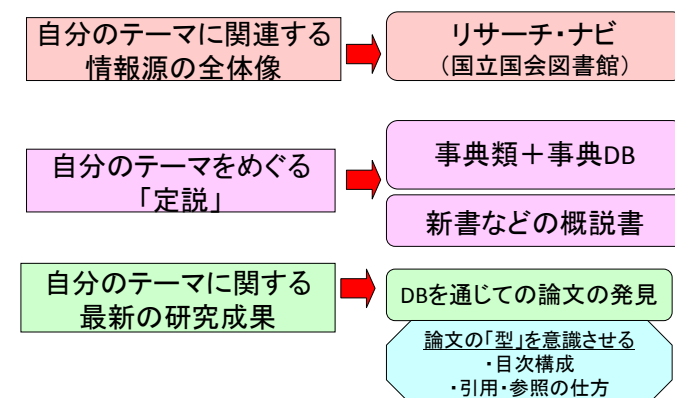
10

情報源の「構造」の大枠



11

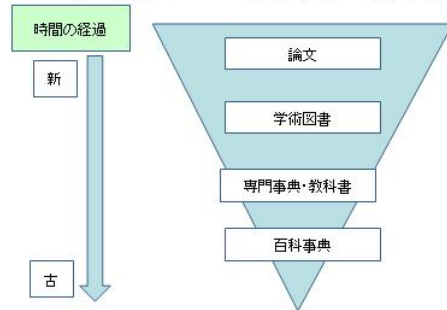
ポケゼミの大まかな流れ



12

用いた図表の例(1)

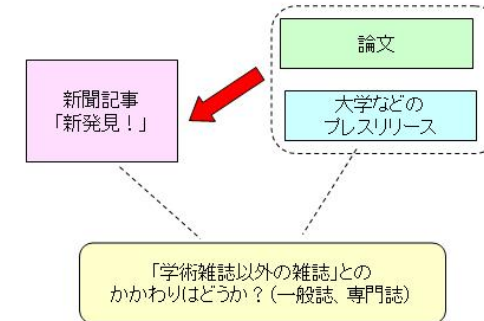
「知識」は一定の方向へ収まっていく
(「新説」による急変化もあるが)



13

用いた図表の例(2-1)

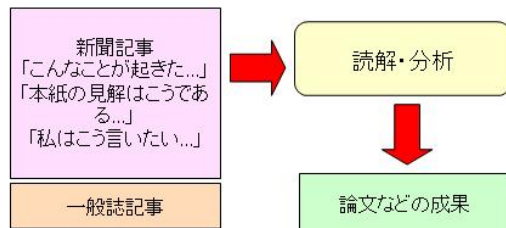
新聞記事と研究とのかかわり: パターン<1>



14

用いた図表の例(2-2)

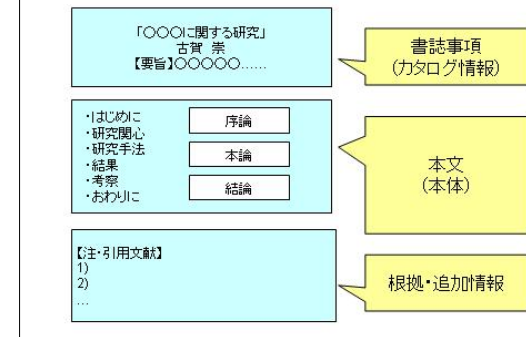
新聞記事と研究とのかかわり: パターン<2>



15

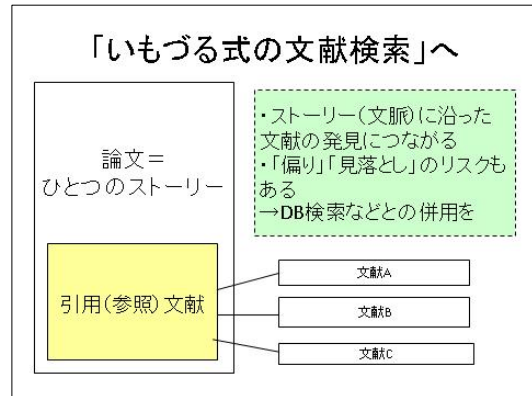
用いた図表の例(3-1)

論文の構造



16

用いた図表の例(3-2)



17

心がけたこと

- 情報・情報源を読むためのポイントの提示
 - 情報源の構造
 - 情報どうしのつながり
 - 例: “論文は引用(参照)文献から先に読むべし”
 - 時間軸
 - 「通説(教科書的知識)」と「新説(研究の最先端)」
 - 事象・概念のとらえ方の移り変わり
- さまざまな情報源に触れさせる
 - 例: OECD iLibrary(各種統計データの加工が可能)

18

効果と反省・課題

- 学生の研究上の関心・発想をうまく導けた可能性
 - 例: 認知科学
- 「アカデミック・ライティング」にも踏み込みたかったが叶わず
- 学生－教員の交流をどう進めるか
- 今回は少人数(10名)対象の授業→より多くの学生を対象としたものにどうすれば応用できるか
 - 「eラーニング」化は可能か?

19

情報リテラシー・学習/教育支援に 関する学内でのニーズの把握

20

実施した調査・インタビュー

- 2011年1月 学生対象の「予備調査」
 - － 古賀が担当する科目の受講者に限定
 - ウェブアンケート＋授業内での聞き取り
 - － 1回生から修士課程院生まで
- 2012年12～1月 教員対象のインタビュー
 - － 各学部の教員の関心や実践を聞き出す
 - 学部専門教育および大学院教育に携わる立場
 - 「全学共通教育」に携わる立場
 - 情報教育に携わる立場

21

教員のニーズの違い



卒論への準備、またレポートの「コピー問題」などを考えると、早いうちから情報探索・表現(引用の仕方含め)のスキルは身につけるべき。



さまざまな情報源の活用法を教えるのは、むしろ専門的学習が本格化しはじめた頃(例えば3回生の夏前あたり)のほうが効果的ではないか。



理工系の場合、研究室単位での研究・教育(4回生以降)を視野に入れるべき。また、単なる「検索法の教示」よりも、論文執筆の手順や「研究のヒントをいかに得るか」に焦点を当てた企画を求める。

22

図書館にとってのPRの課題

- 講習会などについて、ウェブにお知らせを載せるだけでは不十分(受け身)
 - いかに「能動的なPR」に向かっていくか
- － どこをターゲットとするか: 教務掛、学生・院生組織、FD担当部門など
- － 理工系であれば研究室単位での働きかけへの考慮を

23

「情報教育」の枠組みで

- 3つないし4つの枠組みを考える必要
 - － コンピュータ・リテラシー/ITリテラシー: 操作法などのHow To
 - － 情報リテラシー: 情報の検索・分析・表現
 - － メディア・リテラシー: 「批判的読解力」
 - － 情報倫理・法制: 著作権、知的財産、個人情報保護、セキュリティ
- 情報教育を共通教育の一環として意識し体系化しているところ、そうでないところ...

24

蔵書(情報源)・環境のニーズ

- 「教員による研究用の図書」と「教育・学習に求められる図書」とのバランスをいかに確保するか
- 教科書・教材の電子化に図書館として対応できるか
- 「ラーニング・コモンズ」的環境を求める教員の声も
 - 討議を進め、オンライン情報源を活用でき、院生(TA)など人的サポートが得られる場

25

まとめ

26

図書館として考えるべきこと(1)

- 「インプット」(情報の探索・収集)から「アウトプット」(レポート等の執筆)にどうつなげるか
 - 参考事例: 大阪大学附属図書館での取り組み(JLA図書館利用教育セミナー<2011.3, 京都>で紹介)
- 学内の他部局とのつながりをどう構築するか
 - 「大学教育開発センター」など、FD担当部局をまずターゲットとするのが効果的か
 - 大学によって、図書館としての戦略は異なるはず
→ 事例・ノウハウの共有を

27

図書館として考えるべきこと(2)

- 「教職協働」: FD・SDや、「大学ICT推進協議会」の取り組みなどを参考にできないか
- 学生に身近な図書館へ
 - 参照: 「学生協働まっぷ」(KU-librarians勉強会)
<http://dl.dropbox.com/u/15665405/map/index.html>
- 研修に出て、実践報告を聞いても「自分のところでは無理…」とあきらめることなかれ！

28

さらなる課題

- デジタル時代の「知」のあり方は？
 - －「信頼性のあるネット上の情報源」の構築に、大学・図書館はいかに貢献できるか
- 関連発表（資料は古賀のウェブサイトからアクセス可）
 - －「大学を取り巻く課題と大学図書館の役割」平成23年度大学図書館職員短期研修（京都会場），2011年10月4日，京都大学附属図書館．
 - －「「電子辞書と電子リソース」と教育・研究とのかかわり」第13回図書館総合展フォーラム「次世代電子図書館を探る：教育・研究の中の電子辞書と電子リソース」，2011年11月11日，パシフィコ横浜．